



災害検証に基づく防災文化の「再構築」一人ひとりの犠牲死を忘れず語り継ぐ活動を通じて

麦倉, 哲

(Citation)

神戸大学震災復興支援・災害科学研究推進室第6回シンポジウム「学術的知見を活かして大規模災害に備える」：緊急支援・災害後の暮らし

(Issue Date)

2017-12-01

(Resource Type)

conference object

(Version)

Version of Record

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/90004896>



災害検証に基づく防災文化の 「再構築」

一人ひとりの犠牲死を忘れず
語り継ぐ活動を通じて

岩手大学 麦倉 哲

序 幕

岩手大学教育学部 社会学研究室活動紹介

岩手大学教育学部社会学研究室
岩手大学三陸復興推進機構
／コミュニティ再建支援班
岩手大学地域防災研究センター
／まちづくり班

主な活動

コミュニティ再建支援班 麦倉研究室

- ①大槌町避難所調査
- ②大槌町仮設住宅調査
- ③山田町大沢地区仮設住宅調査
- ④大槌町吉里吉里地区自主防災計画策定
関連の調査およびコミュニティ再建支援
- ⑤仮設住宅傾聴訪問活動
- ⑥生きた証を記録し語り継ぐ活動

①大槌町避難所調査

・期間)

1) 2011年3月11日から8月

(現地聞き取り調査)

2) 2013年～避難所の各種記録(名簿、物資の受け入れの記録、日誌、壁新聞、広報等)からの実態調査

YOMIURI ONLINE 2011年10月12日 大槌で避難生活調査「絆」再認識し活力に

記事は表示していません。

仮設住宅調査

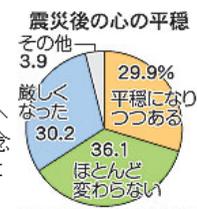
- ②大槌町仮設住宅調査
- 期間) 2011年～2017年
- ③山田町大沢地区仮設住宅調査
- 期間) 2012年～2016年

岩手日報(2013.11.10)

「心の不安」前年より増加 震災2年8カ月、大槌調査



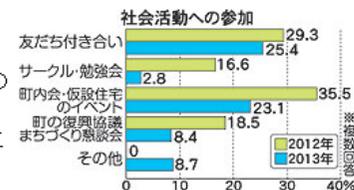
東日本大震災で甚大な被害を受けた大槌町の仮設住宅入居者で、精神状態が震災後から好転していない人が約66%に上ることが、岩手大教育学部社会学研究室の調査で分かった。同じ調査を行った昨年より約8ポイント増加。社会活動への参加や仮設住宅への訪問者が減少している実態も明らかになり、被災者の孤立も懸念される。11日で震災から2年8カ月。仮設生活が長期化する中、専門家は継続的な心のケアと生活課題解決の必要性を訴える。



※小数点第2位を四捨五入

調査では、心の変化について「平穩になりつつある」は29.9%で、前年より5.5ポイント減少。一方で「ほとんど変わらない」36.1% (前年比5.3ポイント増)、「厳しくなった」30.2% (同2.8ポイント増) と共に増加した。

暮らし向きも「被災前も厳しく、今も厳しい」27.8% (同5.3ポイント増)、「被災前も厳しく、さらに厳しくなった」16.5% (同1.7ポイント増)。復興の遅れや資金難などから住宅再建のめどが立たないことや、不安定な雇用なども精神状態の悪化につながっているとみられる。



これに対し、社会活動への参加は、友だち付き合い25.4% (同3.9ポイント減)、サークル・勉強会2.8% (同13.8ポイント減)、町内会・仮設団地のイベント23.1% (同12.4ポイント減) と減少した。

④大槌町吉里吉里地区自主防災 計画策定関連の調査 およびコミュニティ再建支援

- 期間)2013年1月～継続中
- 次の災害に備えてコミュニティを作る。



住民独自に防災計画案

大槌吉里地区 有志、町訪れ報告

14
7/25
岩手日



住民有志で防災計画を作成している大槌町の吉里吉里地区自主防災計画策定検討会（藤本俊明議長）は24日、町に地区独自の防災計画案を報告した。岩手大などと協力し、地域の被災体験を基に分かりやすい文言や図を使った。町は今後、

町の防災計画に反映させる方針だ。

藤本議長ら関係者が町役場を訪れ、計画案の冊子を碓川豊町長に手渡した。碓川町長は「経験を基にした意義のある計画。町の計画と連動させていきたい」と述べた。計画案は「避難す

碓川豊町長に防災計画案の冊子を手渡す藤本俊明議長（中央）

ること』『自分の命を守ること』を最優先に考える」を大原則に、避難環境の整備やルール作りなど七つの中原則を盛り込んだ。避難所は町の指定する5カ所に4カ所を独自に追加した。

同会は計8回にわたって、住民主体で自主防災について話し合いを重ねた。アドバイザー役として地域住民計400人の避難行動などを調査した麦倉哲岩手大教育学部教授は「被災した経験を直視して作った計画には価値がある」と説明した。

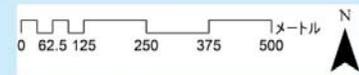
計画案は8月中に同地区全戸に配布し、住

民の意見を聞き取り改善していく方針。藤本議長は「今後は避難所の運営方法なども追加したい」と語る。

2014年7月24日(木)
吉里吉里地区自主防災計画(案)を
大槌町長へ手渡ししました。

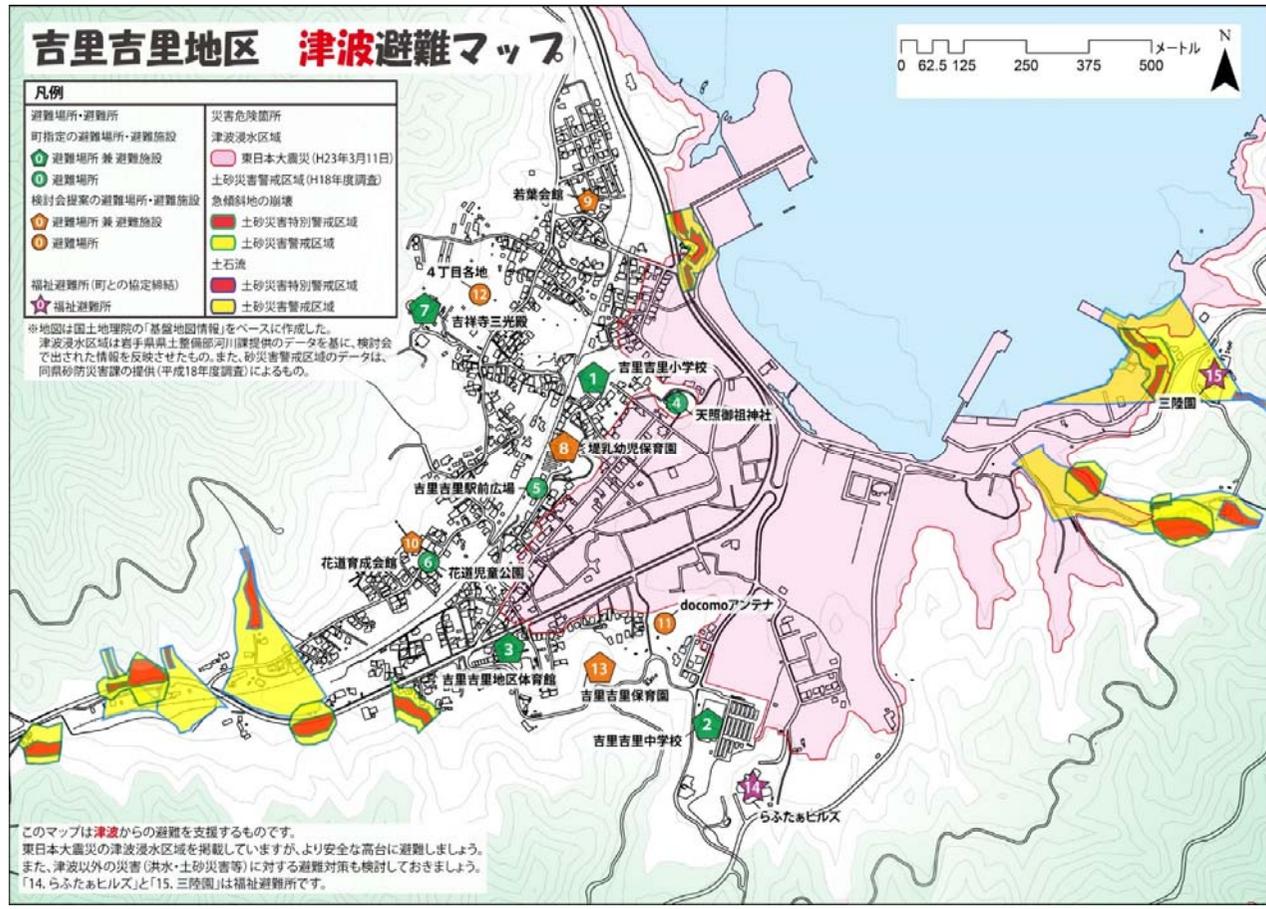
岩手日報 2014年7月25日

吉里吉里地区 津波避難マップ



凡例	
避難場所・避難所	災害危険箇所
町指定の避難場所・避難施設	津波浸水区域
① 避難場所兼避難施設	東日本大震災(H23年3月11日)
② 避難場所	土砂災害警戒区域(H18年度調査)
検討会提案の避難場所・避難施設	急傾斜地の崩壊
③ 避難場所兼避難施設	土砂災害特別警戒区域
④ 避難場所	土砂災害警戒区域
福祉避難所(町との協定締結)	土石流
★ 福祉避難所	土砂災害特別警戒区域
	土砂災害警戒区域

※地図は国土院の「基礎地図情報」をベースに作成した。
津波浸水区域は国土院の「基礎地図情報」のデータを基に、検討会
で出された情報を反映させたもの。また、砂災害警戒区域のデータは、
同県砂防課の提供(平成18年度調査)によるもの。



このマップは津波からの避難を支援するものです。
東日本大震災の津波浸水区域を掲載していますが、より安全な高台に避難しましょう。
また、津波以外の災害(洪水・土砂災害等)に対する避難対策も検討しておきましょう。
「14. らふたあヒルズ」と「15. 三陸園」は福祉避難所です。

⑤ 仮設住宅傾聴訪問活動

2014年6月23日 読売新聞 岩手大研究室、仮設巡回・・・体調や暮らしぶり聞き取り

記事は表示していません。

⑥ 生きた証 を記録し語り 継ぐ活動

朝日新聞2016年12月25日
岩大 心の復興サロン

記事は表示していません。

伊藤 之夫 (いとうくにお) さん



昭和20年4月23日

平成23年3月11日

享年65歳

大槌町小槌21の48

(臼沢)

人生のあゆみ

岩手県浄法寺町(現二戸市浄法寺町)に6人きょうだいの次男として生まれ、大槌町で育ちました。大槌小学校、中学校、釜石商業高校を卒業後、大槌町役場に就職しました。10数年間、勤務した後、割烹料理屋を経営し、大槌町出身のあき子さんと結婚し、3人の子どもに恵まれました。

昭和62(1987)年の大槌町議会議員選挙に立候補して当選、町議6期目でした。末広町に3階建てのビルを所有し、1階には妻のあき子さんが担当する化粧品店「銀少女」、2階には妹の陽子さんが

担当するスナック「大御所」がありました。

震災時の状況

地震の時、之夫さんは自宅に、妻のあき子さんは、あき子さんが経営する末広町の化粧品店にいました。大きな揺れの後、之夫さんはあき子さんに電話で、すぐに避難するよう連絡してきました。さらに軽トラックで店までやってきて、再度、避難するよう指示しました。あき子さんは、すぐには避難しませんでした。津波に追いかけるように、江岸寺の裏山に登り、中央公民館に避難しました。

之夫さんは住民の避難誘導にあたっているところが目撃されており、避難誘導中に被災したと思われる姿が目撃されています。ご遺体は4月末に発見されました。之夫さんは、生前、「災害になると店が危ない。避難所は中央公民館だ」と話しており、日頃から津波に関する防災意識は高かったと思われるます。

ご遺族より

権力者を批判し弱者の肩持つ

権力には食ってかかり、弱者の肩を持つ人でした。繊細な神経の持ち主でしたが、細かいことをグチグチ言わず、「困ったら俺が責任を取るからやれ」というタイプでした。また、「人の悪口は言うな。まわりまわって言われるから言うな」と言っていました。子どもたちは、自分たちを守ってくれて、頼りがいのある父親が大好きでした。

若い時に詩集を出版

趣味は山登りと読書でした。主に経済関係の本を中心に読んでいました。常に本を読んでいて、妻の私にも、読め、読めといつも勧めていました。若い時は詩を書き、詩集を出版したこともありました。

伝えたいこと

「人と交流する場として、実家の跡地に居酒屋を営んでいますので、見守ってください。お墓には石碑をあげて、東日本大震災で亡くなったことが後世に伝わるように刻みました」



結婚式で(後方右が伊藤之夫さん、左が圭世さん、前列左があき子さん、中央が真有さん、右が真希さん)

「おおちゃん」や商品券推進

大槌町のイメージキャラクター「おおちゃん」が平成6(1994)年に誕生しました。「おおちゃん」を推進したり、商店街に働きかけて町内だけで使える商品券を発想したり、「大御所」では、町内初のスナックスタイルのお店を流行させるなど、秀才のある人でした。商品券は国の地域振興券や地方の地域振興商品券の先駆けになりました。

伊藤あき子さん

(妻)

(平成27年6月)

本論 1 死者との対話、相互行為

この報告の目的は、死者との対話がもつ意味を社会的に明らかにすることである。

人は、生きている他者とのみ対話しているわけではなく、亡くなった方とも対話している。

さまざまな次元の対話があり、その中には「相互行為」含まれる

身近な死を経験した被災者が、故人とどのように向き合ってきたかを、大量観察調査と、ケース調査の結果から明らかにするとともに、

報告者自身がフィールドワークを通して死後の他者と向き合ってきた経験から考えたい。

渡嘉敷村で死と向き合う

- 10月1日より沖縄・渡嘉敷村にいます。
- 半年間、3月末まで、国内留学により沖縄国際大学研究員となり、渡嘉敷村の戦争体験者の戦中戦後史の聴き取り調査をしています。
- 渡嘉敷村では当時の村民の4割以上の方が戦争で命を落としています。東日本大震災犠牲死者と、戦災死者とを重ね合わせ、どのような人びとがどのようにして亡くなったのかを歴史の記録に残そうと思っています。
- こちらでの聴き取りは、主に78歳以上の方が対象です。渡嘉敷村の島々は海がきれいなことでも有名です。こちらへいらっしゃる方は歓迎しますので是非ご連絡ください。

(麦倉哲)

住民被災死亡率		
■東日本大震災		
宮城県女川町	おながわちょう	8.8%
岩手県大槌町	おおつちちょう	8.4%
■沖縄戦被災死亡率		
西原町	にしはらちょう	63.7%
東風平町	こちんだちょう	53.3%
浦添市	うらそえし	52.0%
南風原町	はえばるちょう	50.2%
豊見城市	とみしろし	49.4%
中城村	なかぐすくそん	43.4%
北中城村	きたなかぐすくそん	
渡嘉敷村	とかしきそん	42.8%



2017/11/14

沖縄県渡嘉敷島 第2の集団自決場所

2 主体の多様性:人口の多様性

2分類+1	4次元+1	特性
住民登録人口	夜間人口(住民人口)	住民票を置く唯一の場所
交流人口	昼間人口	仕事や学業その他のことで、当該地で活動する人
	ふるさと人口	ふるさとと行き来、思いはふるさとにある人
	関心人口	当該市町村に関心を寄せる人
霊的存在	魂人口	魂として存在感のある人口

3 鎮魂・慰霊 への関心の 高さ

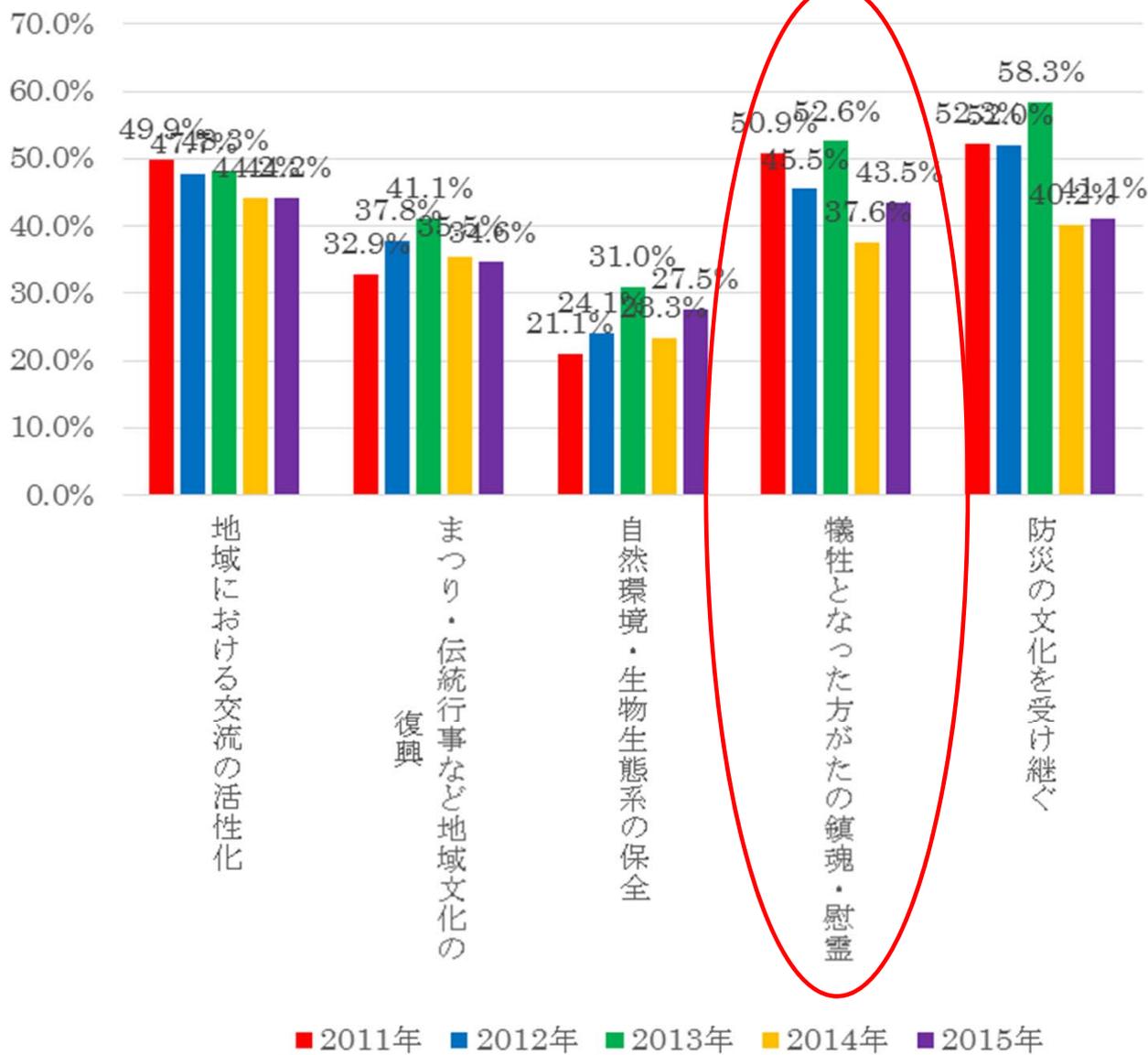


図1 自分自身で関わる復興のまちづくり

—「大槌町仮設住宅入居者調査」(2011～2015年:岩手大学)より

	地域における交流の活性化	まつり・伝統行事など地域文化の復興	自然環境・生物生態系の保全	犠牲となった方がたの鎮魂・慰霊	防災の文化を受け継ぐ
2011年	49.9%	32.9%	21.1%	50.9%	52.3%
2012年	47.7%	37.8%	24.1%	45.5%	52.0%
2013年	48.3%	41.1%	31.0%	52.6%	58.3%
2014年	44.2%	35.5%	23.3%	37.6%	40.2%
2015年	44.2%	34.6%	27.5%	43.5%	41.1%

表1 自分自身で関わる復興のまちづくり:比率1位と2位
 —「大槌町仮設住宅入居者調査」(2011～2015年:岩手大学)より

4 心の復興にとっても重要

- 大切な家族や近親者を亡くした人は、あれ以来変わってしまった日常生活を生きている。
- 心の復興は容易ではないが、死者との対話の継続が一定の大きな意味をもっていることが明らかとなった。
- 帰ってくるかと期待する人、姿の见えない故人が以前と変わらず家にいるものとして暮している人、故人の遺志を継いだり、意向に尽くそうとする人、夢に出てきた故人から励まされる人、お墓に向かって叫ぶ人、故人の気配を実感している人、故人がみえる人、故人が犠牲となった場所(旧役場ほか)に通い続ける人、犠牲となった人びとに見守られていると実感する人など。

- 死をどのように受けとめるか、故人を亡きものとして生きていけるのか。遺族が受ける、内外の独特の社会的プレッシャーもある。
- そうした中で、たくさんの方が犠牲となった被災地では、たくさんの方が、多様な取り組み・営みをし、継続している。周囲の人や、寄り添いの人、社会的な様々な取り組みがなされ、継続している。
- その一方で、故人からも、さまざまな作用、反応がうかがえる。一時的にか、継続的には、以上のようなコミュニケーションの状態が活性化し、場合によって積極化する。

5 死者との対話と相互行為の次元

1 忘れない、2 供養する、弔う、3 受け継ぐ。

それ以外に、相互行為的な交流が含まれる。加えて、2① 夢に見る一夢に出る、2② 気配を感じる一気配をにおわす(見る一現す)、そして、4 「不思議なこと」

表2 遺族と故人の交流

1 忘れない	2 供養する (贈る)、弔う	2 '供養の展開としての交流		3 受け継ぐ	4 不思議なこと、その他
		交流1: 夢	交流2: 気配		
故人と同居しているかのように今もくらす	故人の供養のためにしていること	故人の夢をみる	故人の気配を感じる	故人の遺志を受け継ぐ	大地震の前の出来事と、その後に起こったことにつながり

6 公共圏の形成

寄り添いの範囲が拡大し、死者との対話
相互行為が促進される

東日本大震災で甚大な被害を経験し、多数の犠牲者を出した地域においては、突然の、たくさんの、身近な死が経験され、また単に故人—遺族の関係の範囲を超えた社会的な出来事として広く共有された。

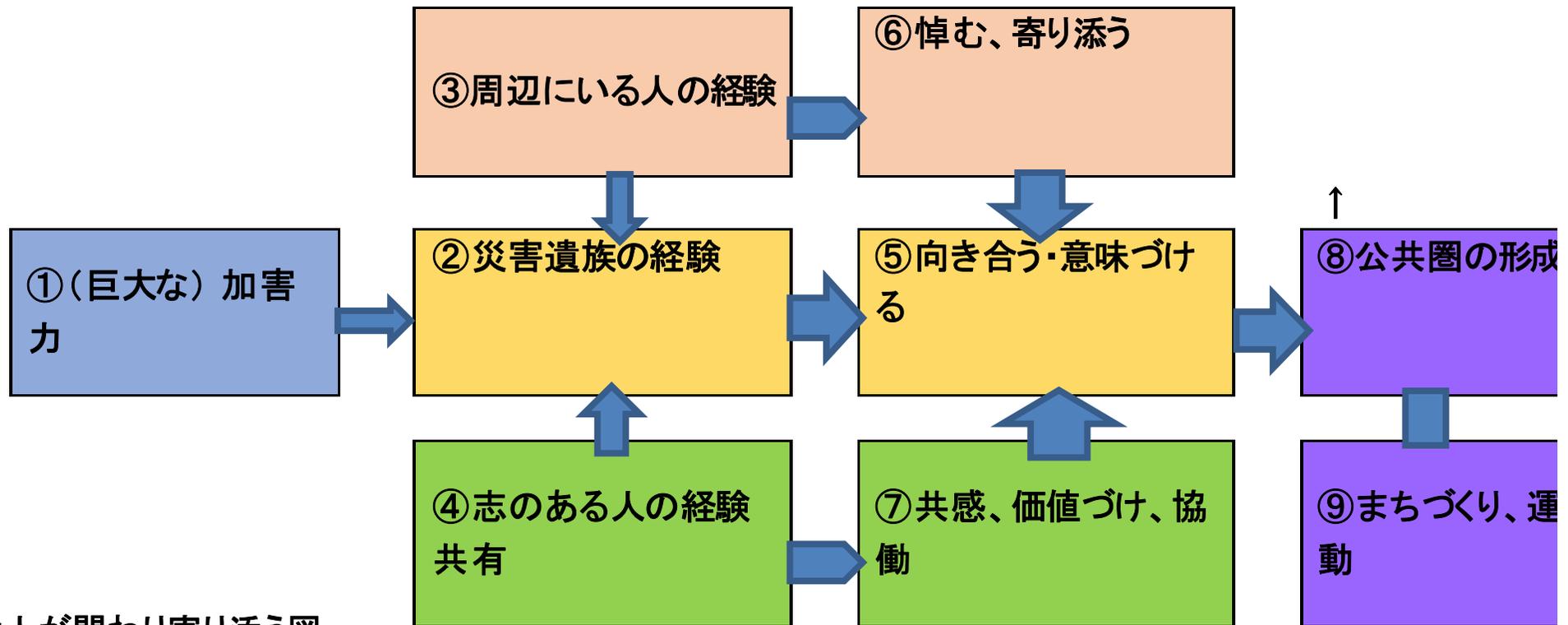


図3 多様な人が関わり寄り添う図

- そこから、ある種の行為の価値が確認され、相互行為のリアリティが顕在化し、いまのこの時代の文化の一部を形成し、それ相応に継承されていく可能性がある。
- とある人の感受性が刺激され、多くの不思議なことが、直接的・間接的に体験される。
- そうしたことを、社会的にどのようにとらえていくのか、拡散した当事者たちの、また関心に引き寄せられた人々の生きている間の営みが続くのではないか。
- 死に関する社会的な営みを、①ごく狭い遺族の範囲に限定しない、②ある専門家の意味づけや儀式に閉じ込めない、③犠牲の社会的意味に対して政治的に支配しないことなど、その可能性について、社会学的に考えたいのである。

(1) 忘れない

- 終わっていない、忘りたいこともあるが、忘れたくないことがある
- 忘れないために、いろいろとすることがある
- 忘れないことで、なにかのかたちに
- 忘れないことを、日常化する。
- 〇部屋はそのままに、形見の品を、話題にする、話しかける、命名する、人形作る、流された家の痕跡を、311ナンバー……。故人からいただいた花、見るたびに思います。

(2) 供養する

- 仏様として供養したい。それ以外に、思い思いの営みを続け、それぞれのサイクルで定期化、スケジュール化していったりする。
- こうした供養に、時には、何らかのリアクションが感じられることがある。
- □墓前に手を合わせ、お墓にふとんをかけてあげたい、装飾品をつくる、写真と全国を旅行、一緒にお出かけ、孫に会いたいだろうから位牌は東京へ、最高の物をお供え、供養する自分の健康が最大の供養、大正琴を演奏する。

- <遺族や生者から、故人へ、向けられている>
- 行方不明の父さん(夫)に届くよう、靴下とチョッキを編んで海に流しました。
- 「亡くなったという痕跡がない。記憶喪失となってどこかにいる」しかし「死を認めて、供養してあげたい」
- 起きてしまったことは仕方がない、早く忘れたほうがよいと考える向きもあるが、亡くなった人と向き合うことが、今を生きていることの一部となっていることも。
- 「〇ちゃん幸せになろうねって」お墓に向かって叫ぶ。
- 郷土芸能団体元代表の死を受けて
- 故人から、遺族や誰かに向けられている。誰にというではなく、顕在している
- (見える人には何かが見える)

(2)① 夢をみる

- 夢で何かの意向が示される。見守っている様子がうかがえる。悔しい思いも伝わる。
- 夢に出てきた故人に問うことも(どうしてる、どこにいる?)。
- 遺族のことを案じていることも。心配しないように安心させる。

- □悲嘆にくれている母に、夢に出てきた、靈感のある姪っ子(故人のいとこ)の夢にも
- 故人がジャガイモもってきたので、ゆでジャガイモ供えた。早く来いと引っ張りにきた。米国旅行した際に、故人と一緒に夢を見た。区切り区切りで夢に出てくる、「どこにいるの」と聞くと、母は「小学校」と答えました。
- いつも笑っている。たまに、しょんぼりして『ごめん、まだ帰れない』と言われた
- 恐山に行った日、花を植木鉢に入れて持ってきてくれる夢を見ました。笑っていない。笑っているお父さん。両親の間に入って手を繋いでいる姉の夢。○寺の墓地の一角を指さし「ここだ」と言い、亡くなった場所を教えてくれた。

- 一度も夢に出てこない。死んでも人に迷惑をかけないようにしているのかな
- ちょうど夢に出てきた直後に今回の依頼があり、忘れられたくないということかと思って引き受けた。
- 手伝ってくれたりする夢をみます。店を見守ってくれているのかもしれない。自分のことを呼んでいる。
- 盛岡都心循環バス「でんでんむし」の石川啄木が描かれたバスに故人と2人で乗っています。どこかわからないけど着いたから降りてと声を掛けると「お前だけ行け」と言って降りてきませんでした。あっちの世界だったのかしらね
- 「夢で〇〇駅付近にいた」、後日、その付近からご遺体が収容された。

(2)② 気配を感じる

- 枕元に立つ。濱の匂いと共に現れる。海へ行く様子を見かけた人が複数ある。
- ひとりぼっちになった自分のところへたくさん来る。
- 孫たちは、おじいさんが来たという。
- 対話を求めて、霊媒師のところへ、恐山へ。共感を求めて大川小へ。

- □たまに、しょんぼりして『ごめん、まだ帰れない』と言われたたまに、しょんぼりして『ごめん、まだ帰れない』と言われた
- 御詠歌の格好をして、海の方へ行くのを、複数の人が目撃している
- 夜中寝ているときに濱の匂いがすると思ったら亡き夫が立っていたような気がした。
- 「地区のお墓を通るたびに「○ちゃん天国で幸せになってね」って話しかけるんです。」
- 「風の電話で孫たちと話をさせている」
- 「山田の拝み屋さんで降霊をしてもらった。巫女さんが本当に息子みたいだった。亡くなった時の事とあっちでの生活を教えてもらった」
- 恐山へ行きました ○さん遺族
- 大川小へ行きました ○君遺族

- 「最近、見守りに家に来てくれている、そんな風を感じる時があります」
- 「海で待っているのが分かるから、子どもたちと海に出かける」
- 「今は車を運転して〇〇君が好きだったトンネルを通るたびに一緒にいる感じがします。」
- 「写真の〇〇子はどこか寂しげで、何かを訴えているような気がします。」
- 「孫たちは「いま、じいじが通っていった」と言う。来て、孫たちを見守っている。」
- 「もっと話をしたかった。亡くなったことが信じられず、まだこの辺りをウロウロしている気がする。」
- 「毎晩深夜2時になると、仮設住宅の我が家にやってくるのが分かる。入口がガタガタする。家族3人だけでない、あと一人か。一人は台所で何かやっている。玄関のカギをかけるのをやめたら、静かに入ってくるようになった。」
- 「たまにザワザワっとすることあるから、その辺にいるんじゃないの。誰ということなく3人とも。鳥肌立つ時ある。」

＋その中には■何かに変わって

- 避難場所にたどりついた瞬間に、自分の前を、白い鳥が、横切った。
- 鹿が、蝶々が…。
- 「(個票に未記載)2頭のシカが仮設の店舗に来たことがありました。(今は亡き)2人が来てくれたのかもしれませんが。」
- 震災の当日、避難をするのがぎりぎりで、やっとのことで、避難場所にたどりついた瞬間に、自分の前を、白い鳥が、横切った。夫は避難が遅れて被災した。あの鳥はなんだったか、夫が自分の避難を見とどどけてくれたのだろうか、自分では思っている。

＋さらに■実際にみる、ちらっと

- 靈感がある人が顕在化。この地が才覚の宝庫かということそうではなく(というよりも)、呼び覚まし、覚醒させた、自分のもつ特性に気づいた。みえる「大槌町旧役場庁舎で、まだ働いている人がいる」
- →だから、早く壊すべき
- →せつかく、働いているのに壊したらかわいそう
- 3年前に聞いた話、麦倉はいま旧庁舎に手を合わせる時「お疲れ様です。」と言い、庁舎2階を見上げます。もしかして、その人が誰だか察しがつくかもしれない。そしたら、「〇〇さん」と呼びかけたい。



写真
大槌町旧役場庁舎

(3) 受け継ぐ

- □ 人づきあいを大事にするところを自分も見習っている
- 難所運営に一生懸命関わってきたのは、人助けと同時に、(避難所の炊き出し担当だった)妻の供養の気持ちもあった
- 家族を守って、お墓を維持して、お店を継いで、住宅を再建して、そこに仏間も…。
- (無理りならない範囲で…)

- いつもあなたの周りにはたくさんの仲間がいたね。おかげで今でも皆に助けられています。
- 次男は整備士で仕事が丁寧とよく言われます。職人魂が受け継がれているのかも知れません。
- 亡き母が願っていた水子地蔵を建立した(困難な時代に病弱はきょうだいが夭逝した)
- 震災の中で、子どもたちは物欲を持たず人のために頑張っています。みんな、お父さんから受け継いだものだと思います
- お父さんが大事にしてきた子どもたちと友達をこれからも大事にしていきたいです
- 「両親の位牌や、お墓は自分がしっかり守っていくので安心して欲しい」
- 「感謝の心を忘れるな。親だけじゃなくて、いろんな人に支えられている事を忘れずに、子どもにも伝えなさい」と言われてきました。私もそんなふう子どもに伝えていきたいと思います。
- 父の想いが、生きた証となって自分や子どもにこれからも繋がっていくんだなということを感じています。」

- 「頑張ってきたお袋を見て育ててきたから、俺も頑張れるんだと思います。」
- 「好きなように生きろ」と言われ続けてきたことを思い出します
- 「残してもらった〇〇地区の土地で同じように畑を作ってゆく」
- 「自分には後見人がいない」とずっと気にしていた。養子となって故人を支えていく(震災後養子となった方)」
- 「親父が建具屋で、自分が大工になったから、父の技能が優れていると思っていたので、匠の家を一緒につくるのか夢だった」
- 「父が立ち上げた工場を引き継ぎ、発展させてきた。今は3代目ががんばっている。4代目も生まれた。見守っていて欲しい」
- 「てまひまを惜しまず育ててくれた子供達も今では中学生になりました。子供たちの心の中で、じい、ばあは今でも息づいています。」
- 「人命救助を躊躇なくできたことを尊敬しています。その勇気ある姿を人生の糧にこれからも頑張ります」

(4) 不思議なこと

- 極端な結果が到来したので、被災地、ご遺族は、あの時のあのことがあれば、なければ、こうしていれば、これが何かを暗示していたなど思いが深くなる。
- 死者と向き合う日常は、回復する途上の病んだ状態ではなく、あたらしい、あたらしくなった日常
- そうした日常が、広がった状態のなかで、死者も向き合う文化が生まれていた。
- 外から来て、共鳴し、何かを深めようとしている我々は、ここの、死者と向き合うことをすっかり忘れてしまった世界を、再帰的に再構築する手がかりをみたりするので、なんらかの普遍的な知見を見出し、分裂しかかった世界の箇所へ発信し、問題提起をしたい。

- 大地震が発生する1週間前くらい、大地震が起きて、母が被災する夢をみました。何かを知らせる夢だったのでしょうか。どうすれば、よかったかと振り返ります。
- 地震が起こる1週間くらい前、夫は「ずいぶんと、みんなをみらせて(他の家族の面倒をみさせて)わるかったな」と言った。このことが不思議だと思い起こす。
- 災害になったら逃げ遅れるかも知れないと、母のことを心配する息子が、地震の朝「おかあさん、たいへんだったら、自分は会社を休んでもいいんだよ」と言った。地震が起きて、自分は避難できたが、息子は被災しかけた人を救助しようとして
- 半年前から、家の中にいるのに会うたびに「バイバイ」と言われました。震災の直前には、いつも以上にノートをきれいに並べて閉まっていた。3月11日に仕事へ行くとき、これまで一度も見送りに出てくることがなかった〇〇さんが見送りに出してくれました。今にして思うと、不思議な体験です。
- 「震災の後、何か起こっても良い方向に向かうのは夫が守ってくれているからだと思います。亡くなってからも支えてくれている気がします」
- 「漁に出る際、「気が向かない」と言っていました。」
- 「日頃、〇〇園(施設)には積極的に通園していましたが、地震当日はなぜか学園に行きたがらない様子でした。」

- 「前日、塩蔵ワカメのアルバイトをしたが、津波でも来て流れたら良い、と言っていた。」
- 地震の起こる朝、通園バスに乗り込む〇〇さんは、いつもと違って、「さようなら」と言っていた。いつもはそんなことは言わないのに、その一言がずっと気になっています。
- 「震災の夜、見たことがないくらい星がきれいで、沢山人が死んだんだなあと思った」
- 「何もなかった自宅の焼け跡から、結婚指輪とファッションリングが見つかった。見つけたのは一人娘の〇さん」
- 「津波の前、近所の犬が狂ったように泣き叫んでました」
- 「遠方の両親のお墓に行ったら、偶然に弟と会い宿も同じで両親が会わせてくれた」
- 「震災の前日、市街地を夜二人でウォーキングをしながら、人は死んだらどうなるんだろうねと話をしていた」
- 「黒石寺蘇民祭で有名な黒石寺のお守りを大事に持っていましたが、震災前日に、お守りを無くしたと母に伝えていました。」
- 3月9日に故郷で父の7回忌をすると、眼前に亡父が出てきて、早く東京へ帰れと強く促され帰った。

7 結果2 生きた証をめぐる2つのケース

(1) 亡くなったお子さんをご両親:

- こうした展開の例をいくつか示そう。中学1年生であった息子を亡くした両親。愛息が学んだ教室を一目見たいと思い立った父は、解体目前の校舎に立ち入り、教室に入った。
- 息子が使っていた机はすぐにわかった。メッセージがたくさん書かれていたからである。「ありがとう」「だいすきだ」「なかよくしてくれて・・・」という内容。
- 教育委員会の許可を得て、メッセージが書かれた机のシートを自宅に持ち帰ると、「そうやって思ってくれる人がいることがうれしい。」と、夫婦で涙を流した。
- 亡くなった方のことを、周りの多くの仲間たちは、忘れないでいる、吊っているのだ。

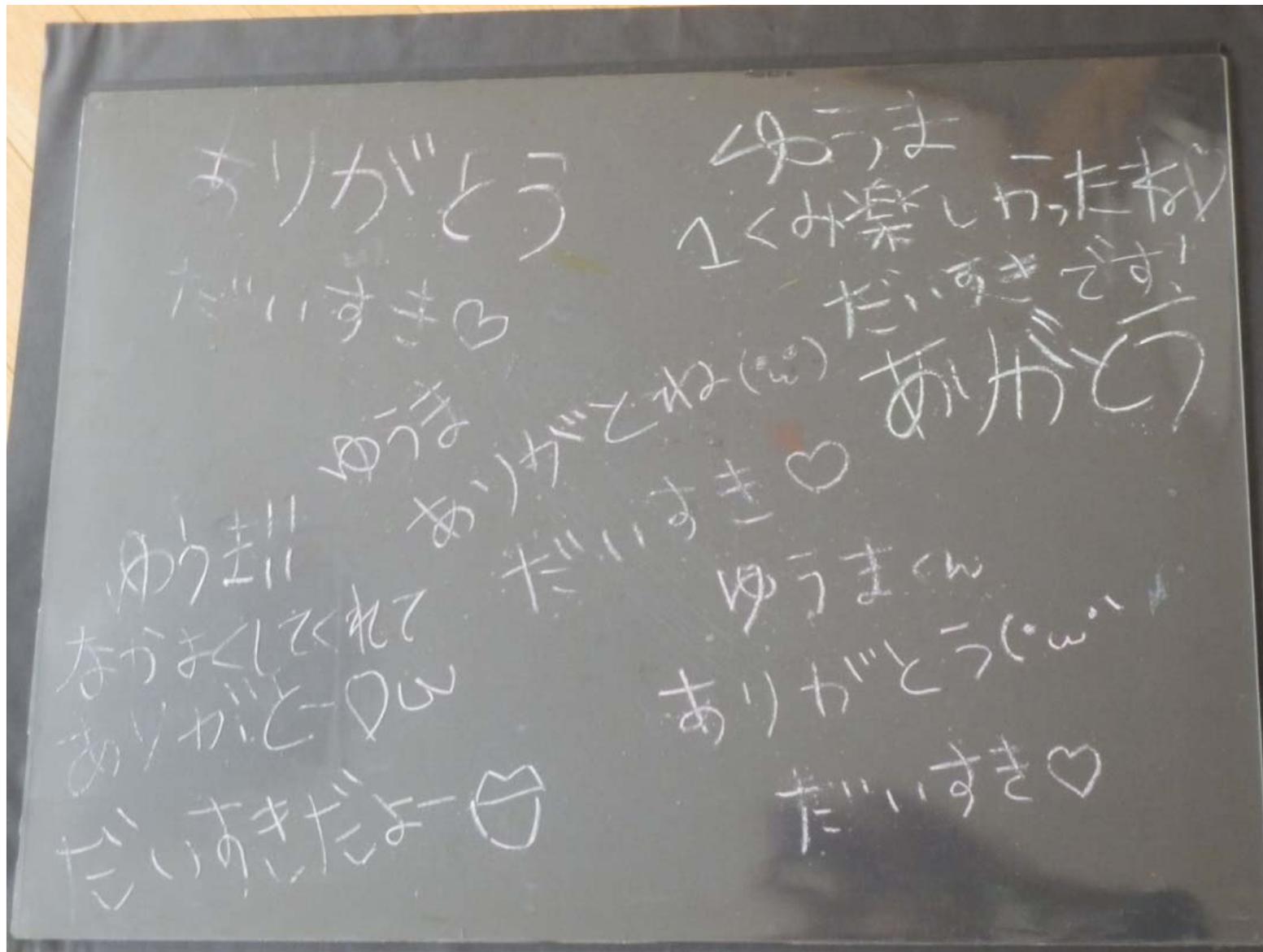


写真6 悠真さんの机のシート

(2) 亡くなったお子さんと父・母

- あの日、息子の乗った学園のバスは被災した。その日の朝、バスに乗り込んだ息子は、いつになく「さようなら」と言った。
- お父さんは、外出をためらうようになった。しかし、ふとしたきっかけで、装飾品を作り始めた。
- 二枚貝のカラを羽に見立てて装飾した蝶々、貝殻やペットボトルのふたや、ビーズやボタン、様々な色の糸やリボンをあしらった各種のつるし飾り、壁掛け、置物。
- かつて網を編んだ手先は、装飾品をつくる匠の手となった。康彦さんの遺影を置いた仏間兼居間は、みるみるうちに装飾品で彩られていった。
- なぜつくるのかといえは、息子が喜ぶからである。この場所では、康彦さんにご両親やきょうだいたちとの対話が、今も続いている。

■故竹澤康彦さんにご両親：

康彦さんが通う学園のバスは白
さんは、その目的を何度も！
さん「きょうなら」とつになっ
なくて大なりしてきてお父さん
ずなを大事に帰ってこないか
ころまで、息子は帰つてお別
ころめた。二枚貝のカラを羽に
やペットボトルのし飾り、壁掛け
った各種の手となつた。康彦さん
くる匠で彩られていった。ア
装飾品で彩られていった。息
ぜつくるのかといえちとの
両親やきょうだいたちとの
れた私たちが、寄らせて

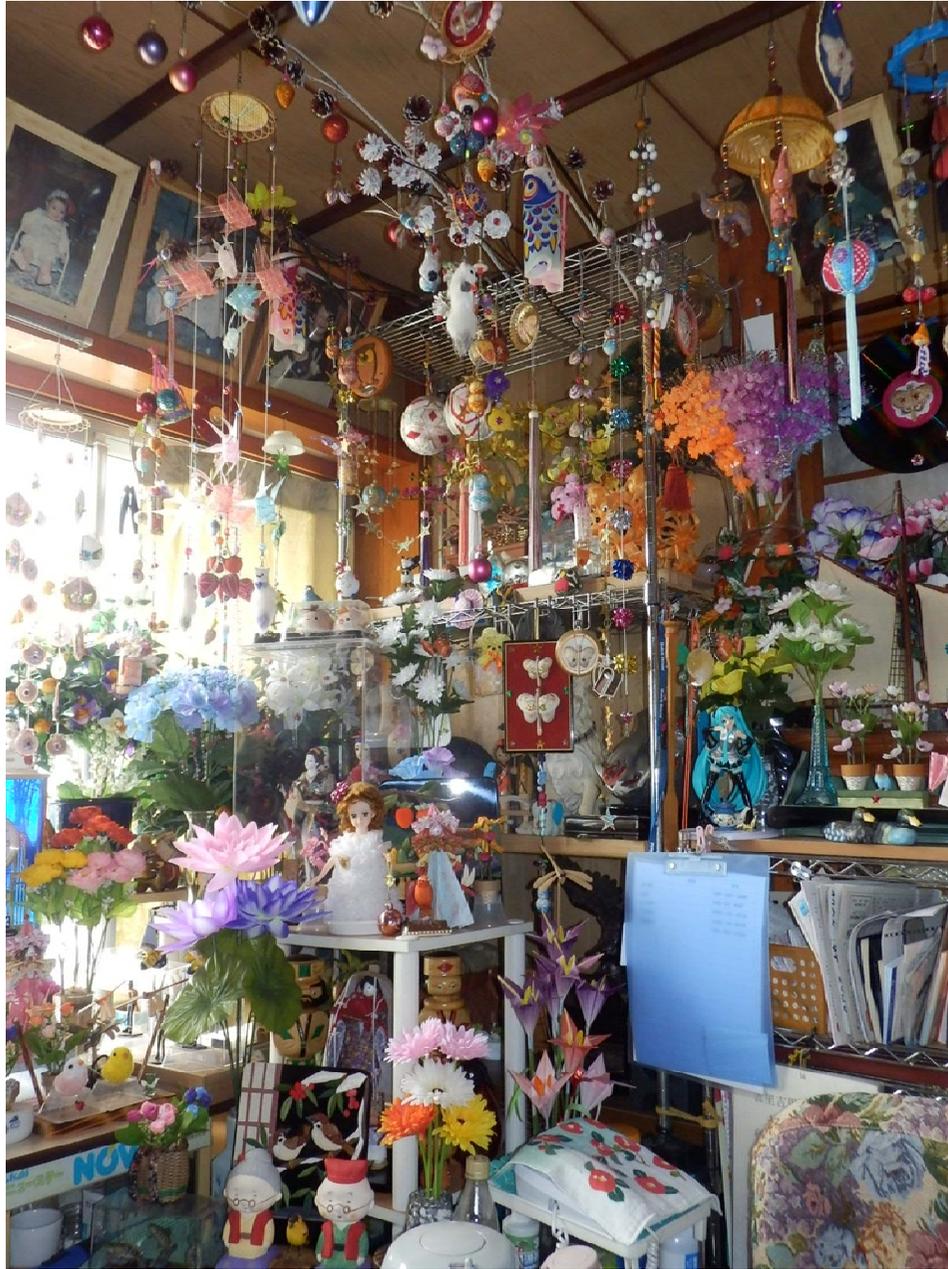
まで送迎し
バス
家族のき
何をしたと
になった。装飾品を作
きっかけのどんぼ、貝殻
、竹細工やリボンをあしら
な色の茶やリボンは、装飾品をつ
編んだ手先は、みるみるうちに
間兼居間は、みるみるうちに
んのお所では、康彦さんとご
この場所では、装飾品に魅せら
る。そして、装飾品である。



写真2 康彦さんの



2
を安





8 結論

- 東日本大震災犠牲者遺族にみる死者との対話は多様である。しかし、多かれ少なかれ、死者との対話が続いていると。
- そのことは、犠牲者家族や親密な知人にとって、日常生活の一部分を形成している。
- この対話が持っている意味や価値については、多様な寄り添い者や交流者や価値支持者が加わることにより、社会的に波及していく効果もある。
- 私も一員であるが、グローバルな社会のもつ負の側面、すなわち物質や経済や軍事が優先され死者が容易に忘れ去られていく面から考えると、個別の死に寄り添うことこそが世界的に価値ある営みであることを学術的に発信していきたい。ご批評を乞う。

■生きた証残し語り継ぐ活動(生き方、運動、研究の営み)

- 1 忘れない →

原点は、悲しみを共有すること

- 2 供養する →

対話を続ける、語り継ぐ

- 3 受け継ぐ →

- 伝承する、検証する(検証に基づくまちづくり、防災)

(1, 2を踏まえ、災害復興文化を構築する)

■防災と社会的脆弱性の克服

ハードの対策

まちづくりの対策

ソフトの対策、公助、共助、自助が機能不全である

社会的脆弱性

■こうした点での検証、学際的研究が不可欠

防災が、逃げなかった論、自己責任論、コミュニティ瀬金論へと集中し、生命の安全保障において最も欠けていた、公助の問題から目を背けてはならない。

■死について考えることは、気が付けば身近なこと
で、誰しもライスサイクルの中で必然的に向き合う
こと。しかし、戦災を含む大災害の時には、このことを
同時に、非常に多くの人々が集合的に考える。死が私
人的なことがらではなく、社会全体に関わっているとい
う共同体験をする。

■死について考えることは、生と死について向き合
うこと。人が生を受けているのは、長い生命の連鎖
からみると、そのある一側面に過ぎないかもしれない
が、生を受けている人びとはそれぞれに生きがい
を追究しつつ、同時に社会が持続的であるための
なんらかの務めを担っている。

■ある人の生の営みは他の人の死と裏表の関係
にある。生を得ていることからくる務めを果たしつつ、
死と向き合い、何かを受け継ぎ、あるいは支えを受
けることもあり、つまり死者と対話しつつ、人生の意
味を深めていく。

■私たちは、科学のテーマとして、災害にまつわる
「死」と向き合う。①拠り所となる社会の文化の持続
や構築に寄与し、②多様な生の一部や多くが損な
われることのないようなシステムを提案していく…
のではないだろうか。

麦倉 哲



語り継ぐ会 ニュースレター

2017年11月11日 第6号

仙台にて初の「語り継ぐ会」を開催しました

盛岡復興支援センター、
仙台市での心の復興サロンを振り返って

10月27日(金)、盛岡復興支援センターにて10月29日(日)は仙台市での復興サロンを開催しました。

盛岡市では大槌、釜石、盛岡の方が集い、仙台では仙台在住の大槌の方、多賀城の方が集ってあらたな交流が生まれました。

会の前半、麦倉は次のような主旨で講話をしました。

「被災から6年間、ご遺族の方がたと出会うことができました。そして、そのご遺族を通して、亡くなった方がたと知り合うことができました。

生きていることは、死について考えることでもあり、自分以外の死と向き合うことでもあります。

これは、今を生きている自分の意味を積極的に考えることとなります。私たちは他者の生き方から学びつつ、そうして生きている自分の生き方が他者の参考になったりします。この6年間、ご遺族はたくさん不思議な経験をしています。これはいったいどうしたことなのか、想いの通じ合う誰かと話してみませんか。」

大槌町を拠点に開催してきた心の復興サロン。私たちはご遺族を中心とした参加者が安心して話せる安全な場になるよう心がけています。

東日本大震災の被災地では「今は亡き人との対話」は続いています。尊い命が失われたことと向き合わずに、ご遺族や近親者・関係者の悲しみをみなで共有することなく、心の復興などありません。

このような気持ちは、宮城県在住の方がたと共有することができました。大災害などまるでなかったかのような「元の生活」への回帰は、将来に伝えるべき大切なことを忘れたかのようなのです。

仙台では、今はなき、両親やきょうだいのことも話題になり今までこのようなことを話すのは初めてということでした。安心できる場だから、話せたようでした。自分が思っていたのと同じ考えをこのサロンで実感できたとの感想もありました。



12月の語り継ぐ会は「マカナアロハ」の皆さんとのコラボです

私たちの心の復興サロンは、2つの面があります。一つは、死者との対話、自分自身の物語化を考えると方向性、もう一つは、心や身体を楽にする活動です。後者をリラクゼーションサロンという位置づけで、ヨーガや、アロマや、マッサージ、合唱や、舞踊などを取り入れていきたいと思えます。

今回はフラダンス、心身を楽にするリラクゼーションの面もさることながら、生や死や、喜びや神とのつながりなど、さまざまな意味が含まれています。そうしたことを学ぶと、いっそう心身が楽になるのではないのでしょうか。楽しみです。(麦)



2017年11月11日 心のサロン通信第6号

「心の復興」サロンのご案内

第1部「フラダンス・Xmasパーティー」

(講演 Makana Aloha(マカナアロハ))

第2部 お茶っこサロン

■日時 2017年12月2日(土) 午前13時~15時

■会場 マストホール(大槌町シーサイドタウンマスト2階)

■第1部:フラダンス・Xmasパーティー

大槌町内外で活躍されている Makana Aloha の方々を迎えちょっと早いクリスマスパーティー。フラガール講演の後には Makana Aloha 代表でフラダンス講師の小笠原弘子さんに簡単な振り付けをレクチャーしてもらい一緒に踊ってみましょう。寒～い冬がやってきますがアロハの世界で心も体も温まりますよ!

■第2部:お茶っこ

リラックスして、お茶を飲みながら、話したいことを話し、人のお話を聞きましょう。気持ちで通じ合えれば、少し楽になれるかもしれません。

これからの予定

★1月19日(金)盛岡復興支援センター、20日(土)マストホール

①心の復興サロンと②リラクゼーションサロンを開催予定。

詳細は次回の通信でお知らせします。

★お問い合わせ先 岩手大学教育学部社会学研究室 麦倉哲

携帯 090-6713-5858 メール mugikura@iwate-u.ac.jp 〒020-8550 盛岡市上田 3-18-33

★この活動は復興庁より補助を受けております。

